

日中韓三カ国国連協会会長会議 — 韓国・水原市で開催 —

日本国際連合協会事務局長
裏千家秘書役

秋山幸子

昨年9月19日、韓国・水原市のキョンヒ大学を会場に行われた、第3回「日中韓ユース・フォーラム」に先立ち、ソウル市内のプラザホテルで日中韓三カ国の国連協会会長会議が行われました。

出席者は、別表の通りですが、今回はWFUNA(国連協会世界連盟)からバク・スギル会長(韓国)の他にボニアン・ゴルモハマディ事務局長(スウェーデン)他1名の方の参加がありました。

日本(東京)、中国(成都)に続いての会議ですが、年毎にますます中身の濃い内容となっていくようです。

今年日本からは、昨年は欠席なさった千玄室会長をはじめとして、いつもご参加頂く明石康副会長、功刀達朗理事、そして来年度の日本で

三カ国での会議となりました。昼食時となりましたので、WFUNAの3名も一緒に歓談なさりながらのお食事となりました。

午後2時からの会議では、千会長が文化がもたらす平和への有効性を話され、日本の総合文化である茶道の持つ平和性やその歴史、またお茶の薬学的効用にも言及していらっしゃいました。

参加者からは、宗教の問題なども提議され各国参加者の活発な意見交換がなされました。白熱した議論は、予定の5時を大幅に過ぎても続けられ、最後に今回の総括が韓国のソン・ジョンヨン副会長(議長)により文章として配られました(別掲声明文参照)。その中にも千会長が話された文化の重要性が明記され、国家政治を議論することの多い中、いつもとは一味違った会長会議になったようでもあります。

の開催地となります。北海道の本部長でもいらっしゃる伊藤義郎理事が出席しました。

午前10時より中韓二カ国の会長会

議が、そして午前10時30分より日韓二カ国の会長会議がそれぞれ行われました。

午前11時から、いよいよ日中韓

List of Participants		
No.	UNA	Name
1	UNA-ROK	Amb. Sun Joun-yung Vice President & CEO of UNA-ROK
2	UNA-ROK	Mr. Kim Young-hie Vice President of UNA-ROK
3	UNA-ROK	Prof. Park Heung-soon Vice President of UNA-ROK
4	UNA-China	Amb. Chen Jian President of UNA-China
5	UNA-China	Ms. Zhang Xiaolan Vice President & Director-General of UNA-China
6	UNA-China	Mr. Wu Bin Program Officer of UNA-China
7	UNA-Japan	Dr. Sen Genshitsu President of UNA-Japan
8	UNA-Japan	Amb. Akashi Yasushi Vice President of UNA-Japan
9	UNA-Japan	Prof. Kunugi Tatsuro Board Member of UNA-Japan
10	UNA-Japan (observer)	Mr. Ito Yoshiro Board Member of UNA-Japan
11	WFUNA	Amb. Park Soo-gil President of WFUNA
12	WFUNA	Amb. Cho Chang-beom Advisor of the President of WFUNA
13	WFUNA	Mr. Bonian Golmohammadi Secretary-General of WFUNA

Statement

The Trilateral Presidents Meeting of UNA-ROK, UNA-China and UNA-Japan with the participation of the president of WFUNA was held in Seoul, Korea on September 19, 2012.

The participants discussed on the theme of "International Peace and the Role of the United Nations: Possible Influence of the Common Culture and Tradition on the Activities of the Three Countries at the United Nations" and exchanged candid views on related issues.

They agreed to make best efforts, on the basis of commonality of culture and tradition of the three countries, to minimize differences existing on their part regarding various issues of the United Nations.

In particular, they expressed their deep concerns on the issues of territorial disputes existing among the three countries, and committed to help resolve the disputes through continuing contacts and dialogue.

They agreed to continue this process of the Trilateral Meeting annually in tandem with the Trilateral Youth Forum.

They thanked Japanese UNA's offer to host the next meeting in Hokkaido in September next year.

September 19, 2012

声明文

日本、中国、韓国の国連協会会長会議が、WFUNA(国連協会世界連盟)会長参席の下に、2012年の9月19日、韓国のソウルで開催された。

参加者は、「国際平和と国連の役割に関し、共有する文化と伝統が三カ国の国連における活動に及ぼし得る影響」につき、討議し率直に意見交換を行った。

参加者は文化と伝統の共通性を基に、国連の諸問題に関し三カ国が持つ意見の相違につき歩み寄るために最善の努力を惜しまないことに同意した。

殊に、三カ国の間に存在する領土紛争問題については深い懸念を表明し、これらの紛争は今後も折衝と対話を通じて解決に導くことを明確に支持した。

参加者は、今後も三者会議を毎年継続し、それと共に、三カ国のユース・フォーラムを開催することに合意した。

日本国連協会が来年9月に北海道での次期開催を申し出ていることに謝意を表した。

2012年9月19日

第3回「日中韓ユース・フォーラム」の成果

― 緊迫する状況下にシンポジウムは対話と協力を強調 ―

日本国際連合協会理事

功刀達朗

日中韓3国の間で春以来緊張がますます高まった昨春秋、韓国国連協会と慶熙(キョンヒ)大学が共催し、日本国連協会、中国国連協会の協力の下、第3回ユース・フォーラムは9月19日から23日まで、ソウル郊外の水原市で開催された。3カ国から参加した70余名の大学生の多くは、緊迫した状況下でフォーラムを開くことに当初懸念を抱いていた。日本人学生20名の中には身の危険はないのか不安を抱いて渡航したものもいた。しかしそれは杞憂に過ぎなかった。学生たちは会ってすぐに友人になる機会を得たことを喜び合い、お互いに考えや気持ちを知るのに極めて熱心であった。シンポジウムでは、とかく自己主張に走りがちな中国・

韓国の学生達も、全ての参加者の発言に耳を傾けていた。今回は、6月に開かれた「持続可能な開発サミット」(Rio+20)の成果を検討する総会を模し、シンポジウムでは「東アジアにおける紛争予防」、「ユースの声を国連政策に反映させる策」、「3カ国のFTA(自由貿易協定)」の3つの重要問題を熱く論じ、コンセンサス、要望、提案などを3頁にまとめ、国連総会議長、事務総長と3国首脳会議に提出した。

これに先がけ開かれた恒例の国連協会会長会議が、今回初めて日中韓3国の協力につき「声明文」を採択したが、学生達はその内容を後に知り、大いに勇気づけられた。



三国国連協会会長会議

ユース・フォーラム開会式

20日の開会式は、鄭璣永(チョン・ジンヨン)慶熙大学アジア太平洋大学院長・国際研究部長の歓迎の挨拶で始まり、宣鈹英(ソン・ジュンヨン)韓国国連協会CEO・副会長、陳健(チェン・ジアン)中国国連協会会長、明石康日本国連協会副会長、WFUNA代表、学生事務局長の挨拶



開会式後のグループ写真

挨拶がこれに続いた。

宣副会長は、「学生諸君が国連と国際関係に関する知的視野を広げるだけでなく、3国ユース・フォーラムを通じ国連活動に参画(involve)して行くことを歓迎する。これから世界の挑戦に立ち向かい解決することは、あなた方の世代の双肩にかかっているが、問題は、協力と妥協によりあくまでも平和的に解決される必要がある」と述べ、「昨日の国連協会会長会議はこの意味で大変有意義なものとなった」と付け加えた。前日の会議が採択した「声明文」の具体的内容には言及しなかったが、そこでは3国間の領土紛争は今後も折衝と対話を通じて解決することを明確に支持し、国連協会会長会議は今後も毎年継続し、それと共にユース・フォーラムを開催することに合意していた。声明文は本誌45頁を参照願いたい。この会議が主体性を発揮し、政治的含意を持つこの声明文を採択したことを学生達は歓迎し、勇気づけられ、日中韓ユース・フォーラムの意義を改めて考えさせられることとなった。

模擬国連会議(MUN)

― [Rio+20]の成果についての総会討議

会議の目的は、2012年6月に開催された「Rio+20」サミットの成果文書「The Future We Want(我々が欲する未来)」で第67回国連総会に求められた国連組織の改善や国際社会の協力促進体制などについて議決することであった。

特に重要トピックとして国連総会に求められたことは、

- 1 国連環境計画(UNEP)の強化
 - 2 総会の下に設置する持続可能な開発実現のための技術移転や資金運用・評価メカニズム策定を目指す協力
 - 3 持続可能な開発目標(SDGs)の策定プロセスに関する決定
 - 4 国内管轄を越えた海洋生物多様性の保護の在り方
- などについて決定することであった。
- そのうちMUNでは、最初の2つであるUNEPの強化と技術・資金

功刀達朗(くぬぎ・たつろう)氏 1934年生まれ。東京大学中退、米コロンビア大学博士号取得。国連本部法務官、中東PKO上級法律顧問、在ジュネーブ代表部公使、フランクフルト総領事、国連事務次長補(カンボジア人道援助・国連人口基金担当)を歴任。国際基督教大学教授を経て、国連大学高等研究所客員教授。

の運用と評価のメカニズムを重点的に取り上げ、決議文書を探択することとなった。

内容・成果

UNEPの強化に関しては、活動範囲と権限の拡大、組織内の新たな委員会の設置、他の国連機関・加盟国・企業を含む市民社会との連携などが挙げられた。会議ではUNEPの下に諮問委員会(Advisory Board)を設置することを決定し、活動分野における環境法整備支援の可能性について議論が行われた。また、国連開発計画(UNDP)との連携強化にも合意し、MDGs(ミレニアム開発目標)の評価とSDGs(持続可能な開発目標)策定に活かすための共同レポートの作成を含む役割の拡大を図った。その他、既存のUNEP理事会におけるメンバーシップ拡大と、国際機関や非国家アクターを含むオプザーバー席の設置に関して合意が出来た。環境法整備支援に関わるUNEP諮問委員会の設置に関して懐疑的であった国もあったものの、任意的な協力であることを明



MUN決議案の審議

文で強調し、インフォーマル・ディベートにおいて、実効性のある環境保護やグリーンエコノミーにおける法制度が果たす役割の重要性を確認することで合意が成立した。

資金運用と技術移転メカニズムに関しては、既存の機関の活用と新たな機関との関係性、資金運用の評価項目の多様化が重要な争点となった。評価システムに関してはグリーンGDPや人間開発指標、新たに作成されるSDGsなどによる個別的评价と総合的评价を用いることが提案された。

また、技術移転協力を促進するメカニズムとして、Global Green Growth

Institute (GGGI)の活用を決議文で奨励することとなった。国内・国際的なレベルで官民協力を韓国・デンマーク政府などのイニシアティブで設置されたGGGIの今後の役割に期待する姿勢は全体に共有されたものの、結局は国連機関とどのような関係を持つのか、既存の環境、開発に関連した様々な条約締約国会議(COP)や条約機構のフレームワーク間における調整などをどのように行うかといった複数の国の指摘を解消することが出来ず、GGGIへの協力を歓迎するに留まった。資金運用と技術移転メカニズムに関しては具体的な決定といえる成果は見られなかったものの、評価基準の多様化や国内・国際的な官民連携といった全体の方向性に関する一応の合意が形成された。

「我々の欲する未来」は283ページから成り、53頁のスペースには過去20年間に行われた関連分野での未了の交渉結果が、十分整理されないまま並べられているのが実情である。主としてこの文書を基に作成されたMUN決議文の対象は、2

つの分野に限られているとはいえず、残念ながら全体としては整合性に乏しいパッチワークの感がある。

MUN手続きの簡素化と標準化

過去10年程の間にMUNが世界各地で開かれる頻度は高まったが、それと共に全く異なった会議手続きに学生たちが遭遇して戸惑うことも多くなっている。多くの手続きは、一般に簡素化された最近の国連の会議運営の現実からかけ離れ、討議の流れをいたずらに遅らせ、討議対象の実質問題から焦点をそらす結果となる。今回は、事前に配布された手続きが時代遅れであったこと、最初の日にその説明にかなりの時間を割いたが、模す会議の背景と会議設定に関するペーパーが配布されたのはフォーラム開催の間近であり、その内容の有用性も乏しかったとの印象を多くの学生が持ったことは否めない。

MUNを奨励してきた国連広報局(DPI)は、多様で煩瑣なMUN手続き問題に気づいていたこともあり、昨年8月末国連本部で、大学生とMUNのアドバイザー役をしばし

ばつとめる教授達を招き講習会を3日間開いたが、参集した80余名の間で問題意識が希薄だったのに驚いたらしい。長年使いなれた手続きを楽しんできた人々が改善するインセンティブを持たないならば、良き範を示すところから始め、徐々にMUNの改善を広めていくしか策はないのかもしれない。

ちなみに、ユース・フォーラムに参加した学生の間で、日中韓の大学生だけが集まるこの貴重な機会は、自分たちの意見や思うところを表現し合えるシンポジウムの方がMUNより付加価値が高いと考える者が年々増えていることを指摘したい。

ユース・フォーラムのハイライトとなったシンポジウム

運営の方式

シンポジウムで次の3つのトピックスを取り上げることが日中韓の国連協会の間で合意されたのは昨年4月のことであった。

- 1 東アジアにおける紛争予防
- 2 ユースの声を国連政策に反映

させる策

3 日中韓FTA(自由貿易協定)その後、従軍慰安婦問題、竹島、尖閣諸島の問題につき緊張がエスカレートしたことを受け、一般の関心が高い第1の問題は、慶熙大学が毎年行っている「国連・国際平和デー」行事の一部として、平和デー当日に十分時間をかけて取り上げることとなった。

放映のためのTVチームが会場に入るとは聞いていなかったが、第1部は、韓国外務省総合政策局長、陳健中国国連協会長と筆者による基調講演と学生達との質疑応答。これに続き、韓国から2名、日本から1名、中国から1名、計4名の学生が夫々10分の報告を行った後、全体討論が活発に行われた。(約2時間半)

ここでTVチームが去った後、第2部として学生たちは十数名ずつの小グループに分かれ、それぞれ自分の国で今何が起きているかについて情報を交換したり、主張を述べ合ったり、憂うべき事態に自分達は何か出来ないか等を話し合った。(約1時間半)



参加者の投票により10余名が受賞

事務局幹部二人も理解したと思っただけは間違いであったと後で気づき失望した。シンポジウムでの討議と結論のサマリーを作ることは自分達の仕事であるといったが、結果が見られないので、立命館大生川嶋菜々美の編集により3頁にまとめてもらい、それを国連総会議長、事務総長、日中韓首脳会議事務局に送付するカバーレターのドラフトと共に学生事務局長に送ったが、2カ月余りアクションは取られなかった。韓国国連協会を通じて問い合わせた結果、総会が休会に入る前にやっと送られた様子である。

国連事務総長宛の伝達文とシンポジウム報告および第1回以降のユース・フォーラム報告その他は、日本模範国連のサイト【<http://mun.org>】からダウンロード出来ます。ご参照下さい。

おわりに

過去3回の評価と北海道での第4回ユース・フォーラムの方向性

昨年12月に北京で日中韓の国連研究者のワークショップが開かれた際、ユース・フォーラム担当責任者が少時協議する機会を得た。過去に得られた改善を踏まえ、北海道で始まる第2ラウンドの更なる発展に中国の国連協会は大きい期待している。北海道本部からの便り(本誌52頁)によれば、昨秋第3回フォーラムにオブザーバーとして道内から参加した6名の大学生を核として25名の学生達が既に準備を進めているという嬉しいニュースがある。関東関西にも優秀なユース・フォーラムのベテランを含め委員会が出来ていく。また札幌大学共催も決まった。



日本代表団と共に

日本から身の危険はないのか不安を抱いて渡航した学生が、ルームメイトに初めて会った時、「日本が好き、行ってみたい」という言葉にジーンと来たそうだが、これは一例に過ぎない。このように親切な中韓の若者達に「北海道が好き、来てみてよかった」と言ってもらえることを期待したい。



小グループ討議の光景

ついで第3部として、5つの小グループから選ばれた報告者が討議の結果につき全体会合で、報告とパネルディスカッションを行い、最後にフロアからの質疑応答を含む一般討論の後、司会者によるまとめの試みが行われた。(1時間半)

2日目に取り上げた第2、第3のトピックについては、第1トピック同様に時間をかけることは出来なかったが、基調講演無しにすべて学生主体で、討論は第1トピックと同じように、報告者複数名に続き全体討論を少時行ったあと小グループに

分かれ、夫々のグループで得られたコンセンサス、意見が分かれた点、国連その他の重要会議に提出したい要望や提言などをまとめて全体会議に報告し、パネルディスカッションと質疑応答を通じ意見の趨勢を把握する努力が行われた。(第2、第3のトピックにつき夫々約2時間)

この方式でシンポジウムが学生達に満足のいくものになった主な理由は何か

1 トピックの選択がよかったので、大学生達の関心を深め、自国中心に考えるのではなく他の2カ国の問題を視野に入れることの重要性を知った。自国の政府も含め、政府が必ずしも賢明でない或いは望ましくない行動に出るとき、自分達に何かできないか一緒に考える機会となった。いずれにせよ全員が参加できた。

2 討議のバックグラウンド・ペーパーを3名の日本人学生が出来る限り客観的に6〜7頁にまとめ、参加者学生60余名全員に事

前に配布した。(第1トピックは神戸大学院生八間川結子、第2は上智大生後藤与佳、第3は京大生田中佑典が、8月半ばの強化合宿に間に合わせペーパーを提供し、その後必要な改善を加えたものを韓国側事務局長に送り、シンポジウムに役立つとの判断の下、全学生に配布された。)

シンポジウムで得られた結果を、社会と未来のためにどう活かすか

「若者は未来のリーダーだ」という言葉を、政治家、官僚や国際機関のリーダー達がよく使うのを耳にするが、彼らは本気で若者の意見に耳を傾けることは減多にない。普通の国では選挙権を当然持つ年齢となっている大学生も含め、国境を越えて希望、要望、提案を共にするとき、それをどう活かすかは重要な問題である。シンポジウムの成果の持つポテンシャルを開発することが望まれる。

成都での第2回ユース・フォーラムの学生事務局幹部は、この問題を直ぐに理解した。水原での第3回の

第4回「日中韓ユース・フォーラム」の開催に向けて

北海道本部

今年9月に、日本と中国、韓国、国際連合協会が主催する、第4回「日中韓ユース・フォーラム」が北海道札幌市で開催されます。

このフォーラムの北海道開催をより意義深いものとするため、昨年9月に韓国で開催された第3回ユース・フォーラムに、道内の大学生6名がオブザーバーとして参加しました。

学生達は、各国代表の学生達の知識の多さや英語でのコミュニケーション能力の高さを肌で感じるとともに、事前準備から当日の司会・進行まで、全ての運営を学生が担っていることに大変刺激を受けて帰国しました。

帰国後、フォーラムに参加した学生達を中心となって報告会を開催し、ユース・フォーラムの素晴らし

さを道内の学生達にアピールするとともに、今年の北海道開催を成功させようと道内の大学に呼びかけたところ、25名の学生が集まり、開催に向けて準備を進めています。

北海道は、国内外から数多くの観光客が訪れている国内有数の観光地であり、中国や韓国からも毎年多くの観光客が来道しています。

世界自然遺産である知床半島をはじめとする北海道の雄大で荘厳な自然環境や、「非诚勿扰（狙った恋の落とし方）」や「Love Letter」などの中国や韓国で放映されている映画やドラマのロケ地巡りなど、北海道の様々な魅力を体感いただいています。

フォーラムが開催される9月の北海道は、気候も穏やかで過ごしやす

く、北海道が世界に誇る、安全・安心で美味しい「食」が豊富な季節です。

参加する学生の皆さんが、有意義な議論を通じて3カ国の交流を深めていただくとともに、北海道の美しい自然景観や秋の味覚を楽しんでいただければと思っています。

ユース・フォーラムの成功に向けて、地元の学生や道民と一緒に盛り上げていくとともに、中国や韓国の学生の皆さんに滞在期間中、思う存分楽しんでいただき、「北海道に来て良かった」と喜んでもらえるような素晴らしい会議にしたいと考えています。

多くの皆様のご来道を心からお待ちしております。